

第32回 武蔵野文学賞「高校生部門」 俳句部門

選考委員：井上弘美・三浦一朗・堀切克洋

■一句単独の部

【最優秀】

薄明をさます鳴き声初鯨 木下 侑

「鯨」は冬の季語だが、言い替え季語に「初鯨」があるとは知らなかった。確かに角川大歳時記のような詳細な歳時記には立項されている。しかし、特に解説はなく例句もない。考証によると、初出は江戸期のいくつかの季語集で、「初鯨」が十月、十一月（旧暦）として出て来るようだ。そこで、「初鯨」は、その年、初めて現れた鯨という意味だろうと理解した。この句が「初鯨」という、極めて珍しい季語に挑んだ意欲作であることを、まず評価したい。

その上でこの句を鑑賞すると、真冬の海に現れた鯨の鳴き声が「薄明をさます」というイメージは、悠然と海に生きる命の、天に向かっての呼び掛けのようでスケールが大きい。ただし、調べてみると、鯨の鳴き声は種類によって違うが、天に向かって咆哮するというようなものではなく、海中で発する神秘的な声だ。日本は長く鯨を食糧としてきており、捕鯨は一つの文化だ。近年、捕鯨の是非については世界的に問題になっている。しかし、この句ではそのような問題を超えて、「薄明をさます鳴き声」という表現に、鯨が鯨として命を全うしようとする姿が捉えられているように思う。（井上弘美）

季語は「初鯨」で冬。その年に初めて岸に近く寄った鯨の姿が見られることを言う。その鯨の鳴き声が薄明の空に響き渡り、人の世の眠りを覚ますという壮大で幻想的な景が思い描かれる。鯨という題材の雄大さに見合った、スケールの大きな句になっていることが一番の魅力である。また、「薄明をさます」という表現は、単に人を眠りから目覚めさせるというだけでなく、薄明の空の下にあってまどろむ世の中全体に何らかの「目覚め」を促すという比喩としても読める。薄明という時間帯に、初物が持つめでたさも相まって、これから何か新しいことが始まるという高揚や期待を感じさせるめでたい句になっているのがよい。（三浦一朗）

晩年のモネの「睡蓮」を見ているように、幻想的な薄闇が目に浮かんでくる。そこに鯨の鳴き声が響く。想像力が聞かせたものなのか、実際に耳にすることができるのか。いずれにしてもこの海には、冬になると「鯨」が姿を見せることがあるのだろう。数年前に、『52へ

ルツのクジラたち』(町野そのこ)の小説が話題となり、映画化もされた。母親に虐待されてきた少年「ムシ」の物語だが、誰にも届かない「52 ヘルツの声」で鳴く鯨がいるということを知った(ほとんどの鯨は10~39 ヘルツで鳴く)。仮にこの鯨の鳴き声が実際に聞かれるものであっても、多くの人々にとっては「聴こえない=関心がない」ものであろう。そのような「声なき声」を受け止め、冬の訪れを目と耳と心で感じ取っている一句である。(堀切克洋)

【優秀】

かき氷かなしき色をしてをりぬ 島田 道峻

季語は「かき氷」で夏。普通はその冷たさ、おいしさなど、夏の暑さの中で快いものとしてイメージされる「かき氷」が、「かなしき色」として把握されていることがまず意表を突く。そのこと自体の面白みがある。だがよく考えてみれば、どのようにおいしいもの、楽しいもの、快いものであっても、深い悲しみの中にある人から見れば、おいしくも楽しくも快くも感じられないことがあるのはむしろ当然のことと言える。世の中の「普通」や「当たり前」から外れたところで、かき氷が「かなしき色」だと映る〈私〉の世界を句にしたことで、句が個性と批評性を獲得している。そのことを評価したい。(三浦一朗)

一読して音がいい。俳句はそれほど韻を踏むものではないが、しかし耳から聞いて覚えてしまう句は詩として印象に強く残る。この句は、「か」という「氷」のような硬く冷たい音が、「かなしみ」に色をつけている。暑い日であれば、ブルーハワイの青も、メロンの緑も、練乳の白もすべてがポップで、楽しく、明るく見えるかもしれない。その楽天性を「かなしき色」と見る作者は、どこか世界をはずから見ているようなところもあるのだが、けっして情緒過多というわけではなく、あっさりとした世界の把握により、アイロニカルなユーモアを醸し出している。(堀切克洋)

春陰の頭痛ブルーライトの棘 宮崎 瑛

「ブルーライト」はパソコンやスマートフォンから発せられる光のことで、一読、題材として新しいと思った。この光は、目に有害で長く浴びると睡眠障害など、様々な障害をもたらすことはよく知られている。それでも、現代社会を生きるためには「ブルーライト」を避けることは出来ず、やがて、「頭痛」という形で作者に襲いかかったのである。この容赦なく襲う光を「棘」と捉えた感性は鋭く、刺さって抜けない痛々しさが恐ろしいほどに伝わる。問題は季語だ。「ブルーライト」を浴びるのは日常のことなので、どういう季語で詠むかが

難しい。その結果、作者が捉えたのは「春陰」で、春という季節特有の、曇りがちでどこか気鬱なものを孕んだ天候。これをもう一工夫して、「春陰の頭痛」と八音で表現した点も優れている。それが以下にくる「ブルーライトの棘」がもたらすものであることを直接は言わなかったことで、多くの人が抱える、現代の病んだ一面を切り取ることにもなったのである。(井上弘美)

「春陰」というのは、桜が咲く時期の鬱々とした気候のことを指す。「花曇」という季語とはまた異なる重さがあり、「春愁」にも近いが、そこまで情緒的ではない。天候によってわたしたちの気分は、いとも容易く変わる。頭痛に苛まれることもあるだろう。節々が痛み出すということもあるだろう(歳をとると)。それが自然物によって救われる——という方向性の俳句もありえるが、この句はさらにパソコンの青白い光を通じて、その感覚に駄目を押ししている。この「駄目を押し」ポイントが、日常の身体性のなかからの確に取り出されていて、その「刺されるような」感覚を「棘」とシンプルに言い切っているところが魅力だ。(堀切克洋)

【佳作】

可惜夜の線香花火まだ落ちず 安藤 俊介

まず「^{あたらよ}可惜夜」という、古典的な言葉が無理なく使われている点が良いと思った。「可惜夜」は読み下すと「惜しむべき夜」で、名残の尽きない気分を言う。「線香花火」はいろいろな花火がある中でも、素朴で音も静か。儂い物の代名詞としてよく用いられる。しかし、先端の火の玉が落ちるまでは、火花の形が変化するので、その僅かな時間を楽しむことができる。この句は、ほんの僅かな時間をも惜しんで楽しもうという気持ちを、「線香花火」を題材として詠んだのが良い。全体にしっとりとした調べの中で、最後を打ち消しにしたことも効果的だった。(井上弘美)

アラームの鳴る間に昇る初日の出 石川 新之助

「初日の出」を見るために、わざわざ海や山などに掛けて昇りくる太陽を待ち構える人は多い。それほどに「初日の出」は一年の始まりを厳粛なものにしてくれ、元気で一年を過ごすための活力を満たしてくれるからだろう。作者もまた「初日の出」を見ようと意気込んでいたのだ。しかし、気が付くと「アラーム」が鳴っていて、既に太陽は昇り始めている。「鳴る間に昇る」という表現にユーモアがあって、思い描いた一年の始まりにはならなかった様子が、ちょっと愉快地伝わる。(井上弘美)

シーソーのペンキ塗り立て春暑し

石崎 成人

新年度が始まる前後に、公園のベンチやシーソーのペンキも一新されたのだろう。てかてかに光る表面に、夏のような日差しが差し込んでいる。「塗り立て」という言葉が選択されているものの、目に浮かぶのはその眩しさである。シーソーの色については書かれていないが、子供用の遊具であれば、ポップな原色かもしれない。そうした色遣いに、「春らしさ」よりは「夏の接近」を感じ取っている。派手さはないが、体感的にもよくわかる句だ。(堀切克洋)

地下鉄に月ちひさくて墓参

田村 典

東京など関東では新暦で盆の諸行事を行うようだが、「墓参」は秋の季語なので、「月」も秋の月として鑑賞したい。「地下鉄」から「月」は見えないが、路線によっては部分的に地上を走る。この句も「墓参」の帰り、地下鉄が地上に出た時、思い掛けなく「月」が見えたのだ。それは小さく明るい秋の月で、墓参りをしてきた後だっただけに、墓石の下に眠る人、そして、いつかはそのように命尽きる作者自身のことを思わせたのだろう。「月ちひさくて」は事実をそのまま詠んでいるようだが、地下に入るとたちまち見えなくなるだけに、生きて地上にいるものだけに「月」は見えるのだということに、切なく気づいたからこそその表現だと思う。(井上弘美)

風車ため息の言い訳をする

冨田 真綾

季語は「風車」で春。春風に吹かれて回る風車はいかにも軽やかで、楽しげであるが、この句で風車を回すのは「ため息」である。春は始まりの季節であり、不安はありながらも期待に胸を膨らませる人が多い中で、ため息をこぼす自分に後ろめたさを感じるのか、〈私〉は言い訳を必要としている。くるくると軽快に回ることはなく、途切れ途切れの溜息とともに少し回っては止まり、少し回っては止まることを繰り返す風車が、鬱々として晴れない〈私〉の心の停滞を表現するものと読める。そのように、あえて侘しいものとして「風車」を表現したところが、この句の取り柄であろう。(三浦一朗)

草いきれ学校の端を今知った

諸澤 佳歩

季語は「草いきれ」で夏。生い茂った夏草が、炎暑の中でむせるような匂いと湿気を発すること。夏の暑い日中、部活で茂みに飛び込んだボールでも探しているのか、学校の敷地の中でも普段なら足を踏み入れないような草の生い茂ったあたりに足を踏み入れる。捜し物が見つからずうろうろするうちに、思いがけず、今まではそれがあのかどうかすら気になか

ずにいた「学校の端」に立つ自分に気がつく。学校という見慣れた日常の時間と空間の中で、不意に口を開けた非日常に遭遇したような不思議な感覚を句にしており、着眼点が面白い。むせるような「草いきれ」との取り合わせも非日常に遭遇した瞬間の演出として効果的で、印象に残る。(三浦一朗)

真夏日や海の底まで泳ぎたき **山本 愛奈**

一日の最高気温が三十度を超える日が「真夏日」と定義される。海に浸かることでも涼しさを感じるはずだが、それに飽き足らず「海の底」まで行かないと済まないような暑さだと見たところが面白い。加えて、単に暑さだけではなく、海水浴で賑わう人の群れにも暑苦しさを感じているようなところがあり、誰もいないところへ涼みに行きたいと願う「反実仮想」が、いっそう炎天下の海の賑わいを想像させる。句末は「たい」や「たし」なども考えられるが、「真夏日」を修飾する連体形の「たき」が、倒置構造となる安定的なかたちかもしれない。(堀切克洋)

■複数句の部

【優秀】

「焼きおにぎり」 佐藤 拓智

第一に、「焼きおにぎり」という、ちょっと力の抜けた題名が面白い。「焼きおにぎり」の香ばしい香りや、手に取りたくなるような形、そんな親しみやすさが、読者をスムーズに作品世界へ誘い込む。第一句は〈十月のプールの落葉つつきけり〉で、まず、この作品がいいと思った。実は「十月」も「プール」も「枯葉」も季語だが、それより、「枯葉」の浮いたプールがよく見えて、ようやく暑さのおさまった、「十月」の澄んだ空を映し出すプールの水面が印象的だ。その「落葉」を傘か、棒切れかですつくといい、どこか所在の無い何でもない動作も、作者の登場の仕方として面白い。

十六句で構成された作品で、効果的だったのは〈天際の雲映す目や馬肥ゆる〉〈農場の杭に手袋刺されをり〉〈野を焼けば茎黒黒と交わりぬ〉など、句柄が伸びやかで一句の背景に広がりを感じる作品があったことだ。特に「野焼き」の句は「茎黒黒と交わりぬ」という写生の目に注目した。こういう句があることで、作品全体が確かなものに思える。一方〈箸置に箸の翳りや長閑なる〉〈白繭をシャーレに優しく戻したり〉のような手元の小さな世界を詠んだ作品もあって、作品世界に変化をつけている。「白繭」の句は実験だろうか、この「白繭」は季語になるか、と疑問に思いつつも「優しくシャーレに」戻すという表現に惹かれる。そして、最後から二句目に「焼きおにぎり」の句が登場。「焼きおにぎり」に引き寄せられる避暑地の人々が思われる。やはり力の抜けた面白さだ。

〈燕来る鋏通しし布に癖〉や〈鶏に顔覚らるる二月かな〉など、文法的な誤りのある作品や〈浮寝鳥ワルツのように凧がされて〉のありがちな比喻があったのは残念だった。しかし、作者の等身大の作品であり、作品全体に無理がなく、おおらかで若者らしい優しさを感じられた点が良かった。今後も俳句を詠んで、表現を磨いて欲しい。(井上弘美)

標題句である〈焼きおにぎり売つてをりたり避暑の宿〉は、避暑地と「焼きおにぎり」というちぐはぐな組み合わせのおかしみを詠む。また、〈十月のプールの枯葉つつきけり〉や〈立待や寿司屋の椅子に足ふらり〉など、季語と取り合わせる題材の選択に独特な感覚がある。一方で、〈農場の杭に手袋刺されをり〉や「野を焼けば茎黒々と交わりぬ」の句など、特に後者は、ものごとを観察する眼の確かさを感じさせて優れている。ただ、全体で秋、冬、春、夏と季節の推移を描こうとしたのはよいが、十六句で四季を描くのはやや慌ただしく、欲張りすぎたかもしれない。「燕来る」句や「箸置きに」句、「白繭を」句など、何を詠もうとしたのか、焦点が定まっていな思われる句があるのも惜まれる。(三浦一朗)

明治時代以降の——つまり正岡子規以降の——俳句の歴史をしっかりとたどり、そこで

積み上げられてきた「伝統」のなかに身を置きつつ、等身大の自分の世界を描き出そうとしている作品である。全体としては、誰も目にとめない瑣末事に関心を寄せる態度が透けて見えるが、視点や描写も確かさがあつた。〈算盤の五玉の固し稲光〉は、そろばん教室での一景か。「五玉」は、梁の上にあるひとつ玉のことだが、「固さ」の把握が窓の外の稲光と響きあう。作品中ほどの〈農場の杭に手袋刺されをり〉〈浮寝鳥ワルツのように流されて〉〈冬薔薇この家主は石油王〉〈なぞりたる絨毯の紋毛羽立ちて〉あたりは、もしかしたらアメリカなどへの留学の景なのかもしれない。

そう思うと、〈鶏に顔覚らるる二月かな〉も立体的に立ち上がってくるようだ（「覚えらるる」と読むと中八となるため、〈二月過ぐ鶏に顔覚えられ〉のように推敲が必要か）。ただし、一句として独立させて読むとき、たとえば表題句の〈焼きおにぎり売つてをりたり避暑の宿〉は、作者の感覚があまり伝わらないのではないか。「をりたり」という中七のゆるやかな表現が、気に掛かった。また、細かいことであるが、仮名遣いの不統一が目立ったことも、推敲不足を思わせた。俳句の骨法をすでに知っている作者だけに、より深みある表現とリズム、そして表記へと感覚を磨きつづけてほしい。（堀切克洋）

【佳作】

「夏の記憶」 石崎 成人

複数の作品によって、一つの作品世界を構成する場合、何句で構成するかは描ける内容に大きく影響する。この作品は、十句で構成されているので、変化に富んだ作品にはしにくいと思うが、身近な生活を「父の日」から「夏至」までの時間でまとめていて、一句一句に工夫があつた。

〈線路見る子供の背中夏の夕〉は、高校生の目から見た子供の後ろ姿で、「線路」を見ているという点に、鉄道好きの子供をイメージさせつつ、「線路」の象徴するものを深読みさせる。〈紫陽花を入れしバケツや夕明り〉は、切った「紫陽花」を捉えている点に意外性があり、しばらく夕明りを浴びつつ「バケツ」の中で水を吸い上げている「紫陽花」が心に残る。さらに、〈パーカーに隠す校章夏の月〉は、「校章」を付けることを義務付けられていることに対する、ある意思表示であり、季語が「夏の月」であることで、第一句の〈窓枠に囚われている夏の月〉と響き合う。「夏の月」は自由ではないという気持ちを象徴しているように思える。一方、〈皆違うアイスを食べる夏の海〉は仲間と出かけた夏の海で、ふと気が付くと、全員が思い思いに好きな「アイス」を食べていることの発見で、「夏の海」の開放感そのものである。最後の〈夏至の日や時計外してイートイン〉は「時計外して」がわかりやす過ぎると思うが、気軽な〈イートイン〉で、談笑しつつ、明るい夏の夜を楽しんでいるような雰囲気が伝わる。ただし、〈理髪店鏡に映る熱帯魚〉は構成の巧みな句ではあると思うが、「理髪店」の「鏡」が何かを映し出すという題材は、俳句ではよくある。

さらに、表現の技法という点では取り合わせで詠まれた句と、一物で詠まれた句とのバランスがよい。また、上五の「や」が二句、中七の「や」が三句と、十句中半数に「や」を使っているのだが、これが、作品全体のリズム感をよくしているように思える。十分力があるので、今後は十五句、二十句と数を増やして、季節を推移させて作品を詠んでみて欲しい。以上、十句から作者像が見えるという意味でも、「夏の記憶」は優れた作品だった。(井上弘美)

【佳作】

「鯨の骨」 河本 高秀

〈倅せな童画ゼリーが揺れてをる〉〈いなびかり束子でこするフライパン〉〈学校に鯨の骨として沈む〉など、独特の感性を感じさせる作品、他の人には詠めない作品があって面白かった。しかし〈月に人を届けるくらい難しい〉と詠んだとき、この「月」は秋の季語として働くだろうかなど、発想の先行した句が気になった。〈竜の玉たまに私を映しけり〉のような、対象を静かに捉えた作品がもう少し欲しかった。(井上弘美)

標題句〈学校に鯨の骨として沈む〉は、目立たないのか、目立とうとしないのかはわからないが、学校生活の中で「沈」んでいる〈私〉が、自らを「鯨の骨」だとする若者らしい尊大な自意識が目目を引く。その点、好き嫌いが分かれるかもしれない。ただ、〈雪柳あらゆる人に気を使ふ〉や〈人間にまあまあ懐く蝶である〉、〈倅せな動画ゼリーが揺れてをる〉など、〈私〉の眼にむしろ人ではないものが親しく、好ましいものとして映るのも、〈私〉が自意識の強さから周囲の人と距離を取るからだと読める。そのように、標題句を中心にしてテーマ性を感じさせる句の並びとなっていることがこの連作の魅力である。そのため、このテーマ性からは外れる、和やかな〈母親と肩たたき合ふ紅葉かな〉は入れない方がよかった。(三浦一朗)

■複数の部 全体評

「春と浮遊」 芦田 昂

個性的な作品ではあるが、読み手に届けるという意識やそのための努力、工夫が足りないように思う。まずは、季語をしっかり使うこと。特別な狙いがない限り、季節の順番に作品を並べること。「したり顔する白兎」や「舌を巻く」「イタチ」など、現実的では無い動物を登場させるには、全てが絵空事ではなく、一方に現実的な作あることで、作品に面白さが備わるのではないかと思った。

「Lost Summer」 小林 光喜

〈棒アイス賭けるあの文字欠けるあの文字〉〈ラムネ瓶陽射しで透かす夏の終わり〉〈晩夏光映す私の伸びた影〉など、詩的な発想の句に注目した。言葉も豊富で揺らぐような情感が持ち味だ。ただし、対象把握に実感に乏しく、眼の前の光景が描けていないという点に弱さを感じられた。季語を踏まえて、「もの」を描く訓練をすれば、作品がもっと明瞭になるので、その努力をして欲しい。

「田園」 田島 光彩

〈傘さして田螺眺める散歩の日〉〈成長の速き早苗の数日間〉〈モノクロに染まったようだからっ風〉といった作品が印象的だった。しかし、「ホーホケキョ」「カヤツリグサ」「カエル」「カイツブリ」など、カタカナ表記に必然性が感じられず、一句一句も五七五のリズムにはなっているものの、散文的な表現に終わっているように思った。まずは歳時記をよく読んで、季語の理解を深めるところから始めてほしい。

「コハク」 三宅 真央

「コハク」との出会いから、生活をともにすることで、家族の一員になってゆく様子が丁寧に作品化されている。〈蒼い目の白き仔犬と夏の空〉〈夏草や仔犬飛び込む散歩道〉など印象的で、何より作品全体が幸福感に満たされているのがよい。しかし、「コハク」への思いが強すぎて、季語が無理矢理付けられているような句もある。

「コハク」と時々登場させるほうが、作品としては魅力的だったかもしれない。

「夏の終わり」

宮崎 大輔

まず、俳句の書き方として〈友達に 松脂を貸す 夏の果て〉のような、一字空けをする表記が気になった。テレビなどで、こういう表記をしている場合が多いので無理は無いが、一字空けは不要。その上で、「松脂を貸す」という内容は面白いと思った。〈もの言わぬ友に サイダー渡す駅〉もいい。しかし「優越感」や「苦勞する」など、生な心情語を使っている句は疑問。季語の無い句もあるので、ぜひ、歳時記をよく読んで欲しい。

(井上弘美)